
私立マッスル学園生徒会～帰還した筋肉と反逆の達也～

爪楊枝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私立マッスル学園生徒会へ帰還した筋肉と反逆の達也へ

【Nコード】

N31220

【作者名】

爪楊枝

【あらすじ】

手島が己の筋肉を鍛えるため3ヶ月のたびに出た。

しかしその3ヶ月の間に鈴木達也という謎の転校生が来て、マッスル学園を支配した。

そして手島は新たな生徒会を築き立ち上がる。

手島の運命はいかに、、、、、、、、、、、

人物紹介（前書き）

そんなものはない

人物紹介

手島拓魅

この物語の主人公、マッスル学園の生徒会長であり、筋肉に命をささげている。

毎日のプロテインは欠かせない。

鈴木達也

手島が修行のたびに出ている間にマッスル学園を支配した男。

冷酷非情極悪最悪悪臭虱汚染男。

戦闘力は未知数。

元生徒会メンバー

TOM

マッスル学園生徒会副会長であり手島の幼馴染。

母の栽培している『禁断の果实』を食べ最狂の肉体を手に入れた。

銀縁メガネ

筋肉では手島やTOMに衰えるもかなりの頭脳をもっている、
インテリボーイ

コウヤ

主にしたい処理を任されている

もちき

何もせず顧問のAGOに殺害された。

AGO

マッスル学園影の支配者、長い顎がチャームポイント
必殺顎ドリルで敵を粉碎する。

真一郎

A G Oの手下、サイコキネシス碎虎鬼念死洲といわれる技を使う。

ボーン掛川

ただの骨

キャラが増えるごとに追加していきます

人物紹介（後書き）

連載始めるぜb

序章 その男は手島（前書き）

連載始めるぜい

序章 その男は手島

〔中華人民共和国南部の山地〕

「やあ俺は手島拓魅いまは己の肉体を鍛えるために山籠りをして
いる」

この男は手島拓魅私立マッスル学園の生徒会長である、いつだかの、
戦いで友をなくし自分の筋肉に失望し修行のたびに出ている

ある日副生徒会TOMからの手紙でマッスル学園に帰還することにな
った。

その内容は

“ 拝啓、手島拓魅様 ”

お久しぶりです、しかしそんなこと行ってる暇はありません。

先日鈴木という転校生が来たのですが、会長がいないのいいことに私を除く生徒会メンバーを捕まえ

死刑を行いました私も捕まって死刑にされるのは時間の問題です。

マッスル学園には鈴木特有の異臭が漂っていて危険です。

すぐにマッスル学園に戻り鈴木を殺^やってください。

敬具

とのことだ

「だからいまから中華国際空港にむかいマッスル学園に戻るつもり
だ、余談だが中国のプロテインはまずい！！」

「マッスル学園校門」

「ふうやっとなつたか、TOMの言うとうり悪臭がひどいな。」

学園は荒れ果てまるで火事のあった廃屋のようになっていた。

「クソッ鈴木め、我が進化した肉体でテメエを殺してくれる」

「おっと、そうは行きませんよ、あなたは元生徒会長手島さんですね。」

不意にも背後から声をかけられた、それとともにかなりの殺気を感じた。

「誰が元生徒会長だ！！俺は私立マッスル学園生徒会長だっ！！！！」

「、、、、手島さん噂に聞いたとうり、すごい闘気オーラですね」

「なんだなら鈴木とかいうやつものすごい悪臭オーラがでてるじゃねえか、それよりお前は誰だ？」

「ほう鈴木様に向かってそんなこといって生きて帰れると思わないでくださいね」

「私は鈴木様の下僕インポータント辰也でございます」

「……！」

序章 その男は手島（後書き）

以上で序章おわり第1章に続く

1章 手島のマはマツチヨのマ（前書き）

びみょうにつかれたでゲス。

1章 手島のマはマッチョのマ

「手島さんそろそろ始めさせてもらいますよ」

そういうとともにインポは手島の視界から消えた。

「!!!!」

「できるだけ殺生せつしょうはしたくないですが」

手島の背中に強烈な蹴りが数十発はいった。

「なんだ肩たたきのつもりか？俺の背筋をなめるなよ」

「ほおう、この私に本気を出させる気ですか？」

インポは手島に突っ込んできた。

「おいおい、本気かそんなんで俺に勝てると思っているのか？」

「そろそろ見せてやろうジャマイカ中国3000年の技」

「滅殺黒龍霸めつさつこくりゅうは!!!」

インポは焼け爛れ、屍と化した。

インポは気を失いかけ死に近い状態で、つぶやいた

「私を倒しただけで喜ばないでくださいよ私は下僕の中でもっとも最弱です、鈴木様にたどり着く前にあなたは死ぬでしょう、、、」

「手島さ〜〜〜ん!!」

二組の青年が此方に走ってきた。

「なんだお前たち待た鈴木の下僕なんていうんじゃないだろうな？」

「失礼な僕たちは反鈴木団体、正徒会です、手島さんが帰ってくる
と聞いたのでぜひ正徒会の会長になってもらおうと」

「で、お前たちの名は？」

「僕は正徒会書記の早坂と言います、自称変体です^^;」

「俺はあ、小池浩介だ、気軽に浩介とよんでくれ。」

とてもキャラの濃いやつらが現れ、手島を正徒会というものに誘った。

「まあいいだろう、その『正徒会』とやらに入ってやろう」

「有り難うございます、これから正徒会室にいてメンバーを紹介
するんでついていてください。」

そして手島と二人組みは沈みかけた夕日の中にいえていった。

1章 手島のマはマツチヨのマ（後書き）

さて正徒会とかいとかいうやつらがでてきました。

次回から本格的な戦闘がはじまるかもよ。。。

2章 筋肉と脂肪は紙一重（前書き）

まあがんばります。

2章 筋肉と脂肪は紙一重

「マッスル学園どっかの教室」

「す、鈴木様校門にてインポータント辰也が肉片になっておりました。」

「ほう、あいつなど捨て駒に過ぎん、それより手島は倒せるのだろ
うな？ 瀬田凜」

「あゝいゝもぢろんでございゝまゝすゝ」

そこにはちりちりのふざけた天然パーマで声は枯れているのか地声
なのか疑わせるような声で
めがねをかけた、どうみてもいじめられそうな男が立っていた。

「わゝたゝしゝにゝはゝこゝの^{ボイス}声かゝあゝりゝすゝ。」

「だはそれで手島と正徒会とかいうふざけた組織をつぶして来い。」

「イゝエゝッサー」

「正徒会室」

「手島さんでは正徒会メンバーを紹介してきます。」

「よう貴様が手島か、俺は正徒会副会長の華○なるSANOだ」
華○というわりには頭が果てしなく馬鈴薯ににいて、キザっぽい
おとこだ。

「まあそんなやつは置いといて私は掛川・骨二郎・翔多です」

「おい！！！！いつからマッスル学園はこんな骨を入学させたんだ？」
掛川・骨二郎・翔多と名乗る男はどっからみても骨の塊だった。

「鈴木がこの学園を支配してから、マッチョのみでなく普通の生徒
も入学できるようになったのです」

「クソッ、マッチョが集うマッチョの聖地を、、」

「エゝエゝエゝエゝエゝエゝエゝエゝエゝエゝエゝ」
謎の声とともに正徒会室の壁が崩れ、一人の男が見えた

「おいおい、俺のイケメンフェイスに傷がついたらどうすんだよ」

「貴様、鈴木の下僕、瀬田だな、俺のイケメンフェイスに傷がつい
たらどうするんだ！！」

SANOが怒鳴り散らした

「ほほう、あなたでイケメンでしたら、この世界はイケメンだらけ
だ、ワロスワロスwww」

「手島あ、ここは俺がやる手を出すなよ」

「大丈夫だ手出しはせん、伝説のイケメン戦士、華○なるSANO
の力をみせてもらおう」

「ボイス・ザ・リッパ声狩りの死神とも言われた私の力をお見せしましょう。」

「俺のイケメンフェイスを馬鹿にしたことおおお後悔しろよおおおお！……！！！」

2章完

2章 筋肉と脂肪は紙一重（後書き）

次回は瀬田VSSANOになります

3章 次元操作（ディメンションオペレーション）（前書き）

tkずいぶん放置してしまいました（ry

gdgd更新していきますよおお

SANOに変な設定つけてすいません。

3章 次元操作（ディメンションオペレーション）

正徒会室

「、、で、その『声狩りの死神』ボイス・ザ・リッパーはなにをするんだ？」

「あなた私のことをなめていますね、私はどこぞかのインポとは違うんですよ。」

「では、、、力を見せてあげましょう、、スウウウウウ」

というと瀬田は息を吸い始めた

「ふゝあゝあああつあああXつあああああつあつあああつあああ
あつあ」

正徒会室に爆音が響き手島、SANO以外のメンバーは一瞬にして崩れ落ちた。

「????、今何があったんだ。」

「フハハ、私の技です『悪魔の囁き（デビルウィスパ）』とでも呼びましょうか。」

「あなた今の一撃をよく耐えましたね、次で死になさい!!」

瀬田はもう一度息を吸い室内中に爆音を響かせた。

しかしSANOは微動だにしない

SANOは呟いた

「おい、俺がいつそんな攻撃が聞いているといった？」

冷静な瀬田が焦りはじめた、

「あ、あなた、なぜ私の声ボイスがきかないのですか。」

SANOは瀬田にむかって語った

「もし、俺が俺自身の次元を操作できたらどうなる？」

「あ、あなたもしや、、」

「そう『次元操作』だ」
ディメンションオペレーション

「自分の聴力を別次元に退避させたんだ、まあ会長はそんなことしなくても大丈夫そうだけどなWW」

手島は無言で頷いた。

「これを使ってちょっとした空間移動もできるんだぜ」

というとSANOは視界から消え瀬田の後ろに現れ制服の内ポケットから出したアーミーナイフのようなもので瀬田の喉元を突き刺した。

「これでもう声は出せないだろ、声が消えたらただのカリフラワーだなー！」

瀬田は意識を保つので限界なのか白目むき出しでこの世のものでないような恐ろしい顔をしていた。

手島はふと、口にした

「おい、瀬田はナイフで刺されて苦しんでるんじゃないか、何か違うもので苦しんでるんじゃないか？」

瀬田の周りには黄色いガスが漂っていた

!!!!!!!!

「アレは、、鈴木が悪臭、、」

ピンポン パンポン、校内放送が流れ始めた。

「あーあー、聞こえてるかな？ 諸君、死に掛けの雑魚などは私は要らない。」

手島は叫んだ

「おい、鈴木お前、何してるんだ!!」

鈴木から返答はない、手島たちの声は聞こえてないそうだ。

「警告しといてやる、その我が悪臭は5分も経ったらその部屋に充滿して皆死ぬであろうさっさと逃げるんだな。」

鈴木の声は聞こえなくなった。

くマッスル学園校庭く

手島たちは校庭に逃げていた。

「どうやら助かったようだな。」

「それにしてもあの悪臭、正徒会室だけでなく東校舎ほとんどを腐敗させ崩れているぞ。」

変体早坂、ステップダンも起き上がった。

おい、骨はどうしたんだ？瓦礫の下でくたばっただろwww的な話をしていると

そこで崩れた校舎の中から不気味な人影が見えた

「おい、まさかあいつって、」

SANOとステップは声を合わせていった。

校舎から出てきたのは瀬田ではない大きな体格の女だった。

「あいつは3－Bの教師荒地の魔女だ、、」

c o m i n g s o o n

く崩れ落ちた生徒会室く

二人の男がいた

「君が、掛川・骨次郎・翔多君かい？ここから助けるから僕たちの仲間にならない」

「鈴木、、か？なぜ俺を？」

「いいからどっちにするんだい？」

『L I V E o r D I E』

3章く次元操作（ディメンションオペレーション）く（後書き）

え？なにつまらない？

そのこと作者が一番知っている

最後の骨とすずきの会話はどうなるんでしょうね W W

ただの自己満小説です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3122o/>

私立マッスル学園生徒会～帰還した筋肉と反逆の達也～

2011年3月17日00時01分発行